2013年4月14日 カトリック新聞

食と霊性

魂にしみ渡る「料理」

「食と霊性」をキーワードに、「食」を通して宣教の可能性を探るシリーズ。第3回は、東京・板橋区の自宅に、悩みを抱えた人々を迎え入れ、手作りの家庭料理でもてなす板橋教会の吉田俊雄さん（71）と妻の紀美子さん（65）。吉田夫妻は、食卓を囲みながら、相手の話に耳を傾ける奉仕の活動を続けて10年になるが、青森・弘前教会の佐藤初女さん（本シリーズ第2回）とも連携して出会いの輪を広げている。

③「あなたが居るだけでいい」
―「存在」としての生き方

吉田夫妻の自宅には、「小さな森 東京」という名前が付いている。そこは誰でもが安心して話せる場だ。

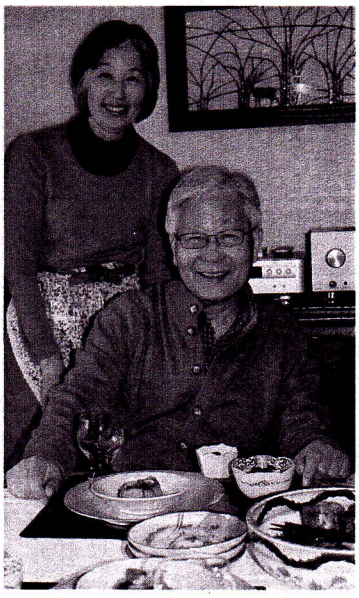
『「小さな森 東京」に行ってもいいですか？』と電話がかかってくると、夫妻は、相手の名前も住所も聞かずに、約束の日を決める。電話の相手の多くは、初対面の人ばかり。口コミで「小さな森 東京」を知った人や、佐藤初女さんが主宰する「森のイスキア」（弘前市）を通して連絡してきた人たちだ。「森のイスキア」は、佐藤さんが家庭料理で苦しみを抱えた人々をもてなし、話を聴き、心に寄り添う活動をしている拠点である。

最寄りの駅で迎える

来訪者が吉田さん宅に来る日は、俊雄さんは、自宅近くの駅まで迎えに行く。そして家に着くと、紀美子さんが、朝から心を込めて準備した手料理のおいしいにおいと共に笑顔で迎えてくれる。

吉田夫妻と来訪者は共に食卓を囲み、旬の食材を使った料理をゆっくりと味わい、楽しむ。夫妻は、相手の話をただじっと聴く。ありのままの相手を受け入れる。世間話を続けていた来訪者が、急に話題を変えて、自分の悩みを打ち明けることもある。そして帰るころには、来訪者は皆、穏やかな表情になっているという。

「朝5時に電話があって、『今から行ってもいいですか？』とおっしゃる方もいました。朝ごはんはまだだと思い、ご飯を炊いて待っていても、その方はいらっしゃらない。翌朝にも、また5日後にも同じ内容の電話。結局、その女性が来ることはなかったのですが、何か特別の事情がおありのようでした。彼女は『いざという時に、行ける場所があると分かって安心しました』と言ってくださったのです」と紀美子さんは話す。


吉田俊雄さん、紀美子さん夫妻

息子の死で人生が変わる

吉田夫妻がこうした奉仕活動を始めたきっかけは15年前、次男の健さん（享年23歳）が急逝したことだ。健さんは、ぜんそくの発作で倒れ、意識不明のまま入院からわずか3週間後に亡くなった。俊雄さんはこう述懐する。

「息子の友達が、大勢お見舞いに来てくれました。息子は本当に友達が多く、皆が異口同音に『ヨシケン（健さん）は優しかった』と話してくれました。意識不明の姿を見て『息子のことを何も知らない！』と愕然としていた僕に、息子は3週間、何かメッセージを送っているように感じました」

健さんの「お別れ会」の時に、俊雄さんは「『息子のメッセージ』を生きていきます」と宣言したものの、そのメッセージは、まだ言葉で表現できるものではなかったという。

吉田夫妻は、健さんが倒れる前に、佐藤初女さんや「兵庫・生と死を考える会」の高木慶子修道女（援助修道会）と出会っていた。この2人は吉田夫妻が2002年に洗礼を受けるきっかけになった人たちだ。

健さんの死から半年後、吉田夫妻は「森のイスキア」に佐藤さんを訪ねた。俊雄さんはその時のことを次のように話す。

「初女先生は、丁寧にもてなしをしてくれました。まさに観音様みたいで、目にうっすら涙をためながら、僕たちに黙って向き合ってくれました。そこに『存在する』だけで、人は大切なメッセージを伝えることができると感じました。『存在する』という言葉が頭に浮かんだ瞬間、病室に居た息子の姿を思い出したのです。私にとって『存在』という言葉が、息子のメッセージを解くカギになりました」

以後、俊雄さんは、退職までの5年間、仕事をしながら、「森のイスキア」や「兵庫・生と死を考える会」、また「パストラル・ケア」と「傾聴活動」にかかわって、「『存在』としての生き方」を模索し始めた。

それまで〝会社人間〟の俊雄さんは、効率主義、経済優先主義の企業論理の世界で生きてきた。企業論理は、常に自分が主人公になって「利益目標に向かって、自らが何かを『する』」世界。自分が話したいことを話し、自分が聞きたいことを聞く、いわば〝自分中心〟の世界だ。

「相手が話したいことを『聴く』とか、相手をありのままに『受け止める』ということをしてこなかった僕は、傾聴する時には、自分の価値観を横に置いて、心のギアチェンジをして聴く姿勢をつくることが大事だと思っていました。ところが、本当の意味で『聴く』ということは、そんな技術的な問題ではないことに気付かされたのです。いのちに向き合う姿勢が問われます。自分の生き方が、平和に満たされた『存在』そのものになっていないと、本当の意味で『聴く』ことはできないのだと分かり始めたのです」（俊雄さん）

吉田夫妻はこれまで、佐藤さんの生き方や言葉からたくさんのことを学んできたという。佐藤さんは常々こう語る。

「気付いたら、すぐ動きなさい。その繰り返しの中で、魂も磨かれていきます」

さらに佐藤さんから教えられたことは、「神様への信頼」、そして「受容する。待つ。見返りを求めない。受胎告知のように神から呼ばれたと感じたら『はい』と受ける」こと。

俊雄さんは、これを「いのちの世界」と表現するが、その世界の主人公は、自分ではなく、神様だ。「キリストに生かされ、キリストを生きる」世界なのだと言う。この生き方ができてこそ、相手の『存在』をありのままに受け止めることができると、吉田夫妻は感じ、佐藤さんを生涯の手本にして生きることにしたという。

料理は作り手の「生き方」が出る

「食材のいのちを活かすことも同じことです。同じ食材でも、そのときの食材の状態によって、昨日と今日のメニューや調理法をすぐに初女先生は変えます。その食材が最も輝く料理を考えるのです。ありのままの食材のいのちを大切にする生き方です」と俊雄さん。

紀美子さんもこう続ける。

「料理には、作る人の生き方が出ます。丁寧な生き方をしている人は、丁寧に料理を作ります。包丁で皮をむくなど、小さいと思えるような事も大切にしています。目の前にある食材のいのちを生かそうとする気持ちで作れば美味しくなり、食べる人の心や五感に響くものとなるのでしょう」

紀美子さんは、ある摂食障害（拒食症）の人が、涙を浮かべながら手料理を食べてくれた時の思い出が忘れられない。食事は、体や心を満たすだけではなく、初対面同士の緊張感を和らげ、心をつなぐ力をもっている。

「相手の話を聴き、ありのままを受容すること」と「食材のいのちを活かす手料理」には、共通して、神の創造した「いのち」を大切にする生き方、そして「キリストに生かされる」生き方があるようだ。

図書紹介

★『ル・フォール著作集3』（ゲルトルート・フォン・ル・フォール／教友社 四四一〇円）

現代のドイツ・カトリック文学を代表するル・フォールの著作集が、美しい装丁で次々と刊行されている。今回発行された著作集第3巻には、特に有名な「断頭台の最後の女」が冒頭に収められた。かつて、ユニヴァーサル文庫で読んだ人も多いだろう。

この小説は、フランス革命下で教会が弾圧され、聖職者や修道女が殉教を余儀なくされた時代を背景に展開する。

主人公のブランシュ・デ・ラ・フォルスは、幼いころから理由のない極度の不安を抱えていた。「この壁、崩れないかしら」「この階段、はずれやしないかしら」といった調子だ。カルメル会に入り、その欠点を克服しようと努力しても変わらない。ブランシュは修道女たちに軽んじられていた。彼女たちは、みな穏々しく断頭台で命を捨てる決意をしていたが、ブ

聖人の暦 4月19日

聖レオ9世教皇
（1002年－1054年）

ブルーノは現フランス（当時ドイツ）のアルザ

キリストの光 光のキリスト

復活節第3主日4月14日（ヨハネ21・1―19または21・1―14）

キリストの福音とルカ5章です。ルカではペトロを弟子に招くときに、ヨハネでペトロの後継者である教皇が「漁師の指輪」をしていますが、これは教皇を頭に頂くわ

22－29
30－35
35－40
44－51
52－59
60－69